

卓越大学院プログラム 令和3年度プログラム実施状況報告書

採択年度	令和2年度	整理番号	2002
機関名	名古屋大学	全体責任者（学長）	松尾 清一
プログラム責任者	佐宗 章弘	プログラムコーディネーター	河口 信夫
プログラム名称	ライフスタイル革命のための超学際移動イノベーション人材養成学位プログラム		

<プログラム進捗状況概要>

1. プログラムの目的・大学の改革構想

1) プログラムの目的

18世紀の産業革命、特に蒸気機関の移動・輸送システムへの適用が、社会のあり方や人々のライフスタイル（働き方、住み方、楽しみ方、人生設計）を一変したように、現代に起こりつつある情報や移動に関する技術革新は、時間・空間の移動コストを最小化し、産業革命以来の大きな変化を生み出しつつある。しかし、気候変動、資源枯渇といった地球規模の課題や、少子高齢化のような社会課題の複雑化、さらにはダイバーシティやインクルージョン、多文化共生といった価値観の多様化により、従来の技術先導型のアプローチでは、人々が求める「豊かなライフスタイルの実現」は困難になりつつある。多様な「豊かさ」の価値を創造し、その実装の方法論を社会システムとして昇華させ、人々が様々な生き方を自由に選択できる「ライフスタイル革命」を先導するには、従来の大学院教育では十分に育成できていない新しいタイプの超学際人材が必要となる。ここで、超学際(Transdisciplinary)とは、異分野(Multidiscipline)に対する俯瞰的知識に加え、自身の専門分野も含めた知識を、専門家チームによる協働により社会実装へと橋渡し(Translation)できることを指す。名古屋大学は自動車産業に代表される製造業の世界的な集積地域である東海地域にあり、100年に一度といわれる移動技術の変革期において、移動イノベーションに基づき、人々のライフスタイルに新しい価値を創造し、その方法論を社会システムに昇華できる人材の養成は、本学の責務である。さらに、大学院改革として、人文・社会分野、工・情報・環境学の教育研究連携と産学共創教育を深め、博士課程に進学する優秀な人材を継続的に増やし、社会に求められる「知のプロフェッショナル」を養成する卓越した学位プログラムを構築する必要がある。（調書P.7）

2) 大学の改革構想

これまでの博士課程教育改革の試みの中で、(1)複数研究科にまたがる大学院教育プログラムが新たな博士人材の成長に極めて効果的であること、(2)産業界との連携による教育がイノベーションにつながる研究の着想に有益なこと、(3)先端領域について、研究所・海外の大学・国際機関との連携教育が大学院生にこれまでにない知的刺激と研究上の示唆を与えること、(4)事前教育と支援により大学院生が優れたベンチャー企業を起こす力をもっていること、(5)博士課程教育改革のためには、新たな学内支援体制の具体化(例、未来社会創造機構の設置や寄付講座の開設)が有益であることを確認した。名古屋大学は、従来の研究科を単位とする博士課程教育に加えて、より弾力性を持った学位プログラムの導入についても検討を進めている。本事業は、ライフスタイルという人々の価値観までに影響を与える移動イノベーションを対象とし、超学際人材の養成を指向しており、他に本学から申請する「アグリテック」や「起源探求」と比較してより広範で超学際的な大学院教育を目指すものである。本学位プログラムには、主として工学、情報学、環境学、経済学、法学、人文学を専門とする大学院生が参加し、履修生の学位審査は、複眼的な視点を盛り込んだ本学位プログラム独自の修了要件のもと、履修生の

専門に近い研究科の教員と異分野教員を含めた独自の学位審査委員会で行われる。この学位審査委員会は、本学位プログラムに加わる他研究科の教員および社会人審査員の本格的参画の仕組みを整備することにつながる。（調書P.16）

2. プログラムの進捗状況

- ・コロナ禍のもとで初年度・2年度を迎えざるを得なかったが、オンライン化を積極的に進め、海外出張・海外研修を除いて、ほぼ順調にスタートしている。
- ・履修生は24名の修士課程学生、4名の博士課程学生を採用する計画だったが、修士課程は計画を上回る34名の学生が履修している。文理融合も、人文学研究科・経済学研究科・法学研究科などの学生がおり、理系・文系双方の学生たちもそれぞれ文理間の交流を肯定的に捉えている。
- ・女性(1期生28%、2期生21%)、留学生(1期生44%、2期生21%)に加えて、社会人も履修をする多様な構成となっており、相互にポジティブな刺激となっている。文理双方の教員による超学際教員討論型講義なども積極的に取り組んだ。
- ・学生たちは卓越性や超学際性についてよく理解し、企業との共同研究への意欲も高まっている。
- ・履修生を4つの班に分けて班ごとのミーティングを行う班活動を活発に行い、留学生との間での英語によるコミュニケーションの機会ともなっている。
- ・縦糸型・横糸型コースワークをはじめカリキュラムの工夫を実施しており、アクティビティポイント、アクティビティツリーなどを通じて弾力化と順序化をはかった。
- ・東海地域におけるモビリティ産業の集積、名古屋大学や卒業生によるベンチャー企業群との連携を活かした、連携企業とのメンター制度の実施も本格化させつつある。
- ・6つのリーディング大学院・先行する3卓越大学院の経験を踏まえて、計画どおりにほぼ着実に進捗した。

【令和3年度実績：大学院教育全体の改革への取組状況】

- ・本事業を通じた大学院教育全体の改革への取組状況、及び次年度以降の見通しについて

1) ビジョン・ミッションステートメントの明確化

- ・履修生とのディスカッションを通じて課題等を抽出し、その後、ビジョンとミッションステートメントの提案を募集し、投票を行った。その結果、ビジョンを「REDEFINE THE DISTANCE」と定め、ミッションを「自身の専門性を高め、異分野を共に学び、社会における移動の多様性を理解し、価値の共創に挑戦します」と定めた。ビジョン及びミッションステートメントは適宜見直しを図っていきたい。

2) アクティビティポイントについての工夫

- ・学生活動記録システムの導入:学生の学修活動を記録・管理するため、活動をTMIポイントに換算し、修了に足る学業・活動を行ったかを評価することとした。単位より細かい粒度で活動を評価し、超学際協働力を育む活動を促進するようこころがけた。カリキュラム上でポイントが決まっているもの(講義など)も管理することとした。評価にあたっては、合意型ポイント形成方式を採用し、学生自身が活動を考慮してポイントを申請し、教員との合意によりポイントを確定することとした。

3) アクティビティツリーの明確化

- ・履修生が学習するにあたり、各履修科目がTMIアクティビティツリーのどの階層(知識基盤、実践基盤、博士研究)に位置づけられるのかを明確にし、また、自身が目指す研究スタイルに合わせてどのような履修科目の組み合わせが想定されるかをモデルケース(企業実践、グローバル体験など)を設定して明確化させた。

4) 履修生募集活動の強化

- ・文系学生の獲得強化も意識して、2月に3回のオンライン説明会を実施した(計34名が参加)。

5) 広報活動の強化・実践

- ・TMIホームページの公開:縦横のつながり強化を意識して、TMIプログラムやイベント紹介、学生インタビュー動画等を日本語で掲載していたが、更に

英語版を公開した。加えて広報活動強化のため、パンフレット（日本語）を作成した。英語版の作成も検討している。

- ・公開シンポジウム等の開催：令和3年11月11日に第一回超学際移動イノベーションシンポジウムをオンラインで開催し、250名を超える登録者を得て好評を得た。この他、外部招待講演やフォーラム等への参加も積極的に行った（東海情報通信懇談会R3/10/27、電気関連学会東海支部連合大会R3/10/27）。
- ・海外連携先との国際セミナーの実施：令和4年1月18日にカタール大学交通安全センターとの間で国際セミナーを開催した。参加者52名（カタールから25名）が参加した。今後の連携に向けてMOU締結交渉を継続中である。

【大学院教育全体への改革への取組み状況】

- ・本プログラムは、オンライン受講環境の急速な整備、履修生の活動に基づくポイント制度の設計、学際的あるいは産学共創的な教材の構築や学修機会の創出を行っており、このことは、各大学院や大学院システムに関する教育改革に向けた機動力となっている。さらに本プログラムを通じての大学院教育改革への取組みを強化するため、令和4年4月1日付で「超学際人材育成室」を設置し、本取組みへの強化を図ることとしている。